

# 路地空間における住居内部での生活様態と 領域意識の現われとしての溢れ出し

佐多祐一<sup>1</sup>・中井祐<sup>2</sup>

<sup>1</sup>非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yuichi@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

<sup>2</sup>正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

今失われようとしているものの中に路地という空間がある。昭和の時代には路地で行われる活動は珍しい光景ではなかったものが、次第に失われていくにつれ、現代ではノスタルジーと共に語られることが多くなり、コミュニティ形成の場としての路地が取り上げられるようになった。しかし、路地は住むための環境や設備を考えると決して良好とは言えないものであったはずである。本研究は、フィールドサーベイによって、より実際の住民の生活に則した調査を行い、蜜な集住環境である路地空間での生活様態や住民同士の人間関係が路地空間への物の溢れ出しに与える影響を考察することで、集住という暮らし方について再度考え直し、今後の社会に対する何かしらの示唆を掬い取ろうとする試みである。

キーワード: 路地 溢れ出し 生活様態 領域意識

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景

昔から絶え間なく行われてきたモノの更新は今に始まったことではない。人々は住む場所も、暮らし方も、考え方も、時代と共に変化させてきた。極自然な現象であるモノの更新が現代において否定的に語られる事があるのは、その更新があまりに早くあまりに劇的であり、使い捨てられる物が増え、急過ぎる変化になにかしらの抵抗感を抱くからではないか。

路地という空間も現代社会における変化の中で急速に失われていこうとしているものの一つである。元々は江戸の町割りによって長屋と長屋の間に作り出された空間であり、昭和に入ってもまだまだ長屋暮らしの人々は多く、そこでの活動は珍しい光景ではなかった。しかし、近年になって長屋が解体されると共に生活の場としての路地空間が消えていくと、メディアや都市を論じる人々から注目を集めるようになり、そこでは肯定的に路地が語られ始める。メディアはノスタルジーと共に路地のイメージを誇張し、都市計画家はコミュニティの形成の場として路地を取り上げている。

路地において「貧乏ではあるけれども、住民同士が助け合って暮らしていた」と言われるような暮らしが形成されていた事は事実であろう。物に溢れた現代社会で、

夢も希望も持たない少年が犯罪を犯し、ニートや引きこもりと呼ばれる人々が現れ、他者との付き合いが極度に薄れてきた現代社会においては魅力的な言葉に聞こえる。少なくとも現代のマンションよりは何かのコミュニティが形成されていたと言える。しかしそれだけで路地の暮らしを良いものとする見方は、一面的な解釈に過ぎず、そこでは相性の合わない相手でも付き合いがなければならぬ苦勞や、決して良好とは言えない居住環境、不十分な住宅設備への不満もあつたに違いない。

そこで本論文は、路地で起こる生活を偏見を持たずに、なるべくありのままを記述することで路地研究に対する新たな方向性を見出し、住民の生活様態、人間関係と路地空間への物の溢れ出しから日本人の共有空間の使い方、さらにはそこに潜在的に含まれる欲求を考察し、今後の集住のあり方に対しての示唆を得ることを目指す。

### (2) 既往研究

これまで路地に関してなされてきた研究は数多くあり、研究している分野も民俗学や社会学、建築計画、都市計画、景観学、造園学と多岐にわたる。それらのうちいくつかを例に挙げる。

①市川大輔、玉川英則「既存『路地空間』の性質とその使われ方—月島、根津、中央地区の比較から—」日本建築学会 1999

②高橋俊, 伊藤弘, 下村彰男「中央区月島を事例とした密集市街地の路地における植物の配置パターンと空間特性」日本造園学会誌 2005

③青木義次, 湯浅義晴, 大佛俊泰「路地空間における溢れ出しがコミュニティ形成に与える影響」日本建築学会 1988

④永山悟「住民・住居との関係性に着目した路地空間の調査と考察」2007

⑤大橋良之介「住居内部における住民の生活様態と路地空間との関係」2008

既往研究のほとんどが溢れ出しに注目しており、アンケート等を使って人間関係やコミュニティと溢れ出しとの関係について論じたり、路地の形状や、建築物の用途と溢れ出しの関係について論じている。しかしどれも住宅内部にまで深く入り込み住民の生活様態と人間関係、溢れ出しとの関係性にまで言及していない。

それに対し、既往研究⑤、⑥は住居内部にまで踏み込んで路地におけるコミュニティや溢れ出しについて論じようと試みた研究である。本論文もそれに連なるものとして位置づけられる。

### (3) 目的と方法

本論文の目的は、生活空間としての路地の特徴を住居内部と一体のものとして記述し、路地空間のコミュニティスペース、オープンスペースとしての特徴を考察すること。更には、住居内部と路地空間との関係から、路地空間に溢れ出たものにはどのような欲求が隠されているのかを考察することとする。

方法は、下記の順で行う。

- ①予備調査によりいくつかの路地を選定
- ②選定した路地を比較検討し本調査の対象路地を決定
- ③住宅内部の間取り、路地空間、溢れ出しを図面化  
住民へのヒアリング
- ④データの分析・考察

## 2. 調査

### (1) 予備調査

#### (a) 異なる路地の比較

『ゼンリン住宅地図2008年度版』を参考に路地が多い地域をいくつか選出し、永山、大橋の対象地であった根

表1 予備調査まとめ

	根津一丁目	元麻布二丁目	佃二丁目	千住龍田町	墨田二丁目
舗装状態	土	アスファルト 両端に排水溝	アスファルト 中央に排水溝	土	アスファルト 両端に排水溝
溢れ出し状態 (植物)	量: 多め 配置状態: 雑然	量: 多め 配置状態: 比較的整然	量: 多め 配置状態: 雑然	量: 少なめ 配置状態: 整然	量: 多め 配置状態: 比較的雑然
溢れ出し状態 (植物以外)	量: 多め 配置状態: 雑然	量: 多め 配置状態: 比較的整然	量: 多め 配置状態: 雑然	量: 少なめ 配置状態: 整然	量: 少なめ 配置状態: 比較的雑然
道幅(m)	2~4	2	2.5~4	2	3
主居の建築年数	100年前後(長屋)	80年前後(長屋)	100年前後(長屋)	60年以上(長屋)	不明(戸建)
路地の形	狭小路 道は屈曲	狭小路 道は直線	通り抜け路地 道は直線	通り抜け路地 道は直線	通り抜け路地 道は直線

津, 元麻布とも比較しながら本調査対象地を決定する。

予備調査で調べた地域の特徴をまとめたものを表1に掲載する。

それらを比較検討した結果、本調査対象路地を「佃二丁目」の路地に決定した。決定要因は、溢れ出しが植物・植物以外共に多いこと、通り抜け路地であること、現在新田島に現存する最古の長屋であることである。

#### (b) 本調査対象地域と対象路地の特徴

対象路地を示した図を図1に示す。さらに長屋の並び方を図2に示す。

対象路地は北に数十メートル行くと高層マンションが林立するような場所にあり、今まさに街が更新されようとしている場所である。対象路地の長屋は北東側には平屋の八軒長屋(K~R)が、南西側には二階建ての二軒長屋三つと、四軒長屋一つ(A~J)が建つ。

#### (c) 調査対象地域の歴史概要

江戸時代前期に、それまで無人島であった石川島及び佃島に漁師が移住して以来、漁師町として栄え始め、江戸時代中期になると石川島に人足寄場が設置され、その後明治初期に石川島監獄署に改変された。一方幕末期には石川島に洋式造船所が建設され、石川島における近代的造船工業の幕開けとなった。明治期の近代工業化に伴い月島は次々と埋め立て造成され、1894年に新田島の造成が完了すると共に多くの職人が移り住んだ。関東大震災により一部を残して全焼したが、東京大空襲では佃島、月島の一部は戦火を免れ、当時の長屋はそのまま残ることとなった。

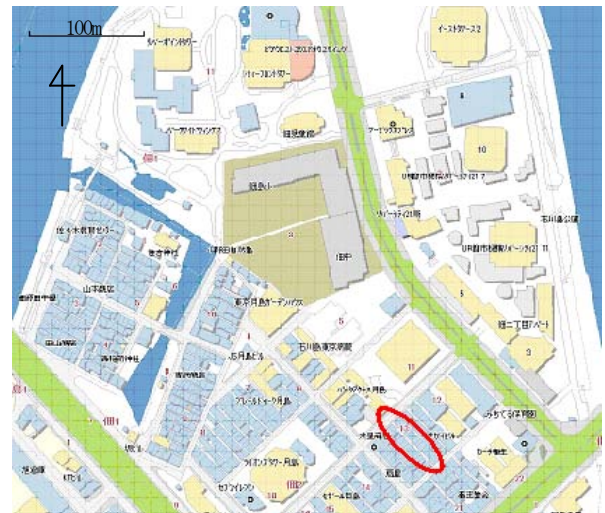


図1 対象路地周辺地図

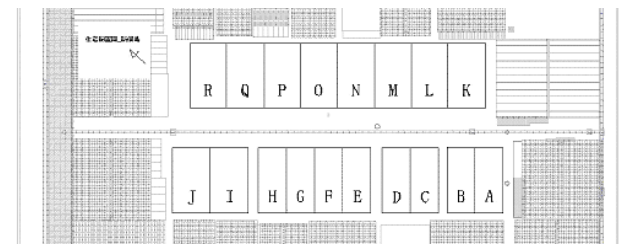


図2 対象路地住宅



写真1 対象路地の俯瞰写真 写真2 南東側から見た対象路地

### 3. 分析・考察

#### (1) 平面図による現状分析

##### (a) 住居空間の面積比較

新田島の路地住宅の特徴は実測調査から、同じユニットが規則正しく並んでいることと、内部空間の狭さであることが分かった。そこで既往研究の対象路地である根津と元麻布の路地を構成している住宅について比較する。

各路地を構成する住居は、根津では二階建て長屋と戸建住宅、元麻布では二階建て長屋、新田島では北側が平屋長屋、南側が二階建て長屋となっている。各地域の住宅の延べ床面積(バルコニーを除く)を実測値に基づいて最小の家、最大の家、各地域の平均を算出する。

- ・根津 最小：43㎡ 最大：63㎡ 平均：50.4㎡
- ・元麻布 最小：41㎡ 最大：56㎡ 平均：49.3㎡
- ・新田島  
平屋 最小：25㎡ 最大：25㎡ 平均：25㎡  
二階建て 最小：32㎡ 最大：43㎡ 平均：36.4㎡

新田島にある平屋長屋の床面積が小さくなるのは当然だが、二階建て長屋を比較しても根津と元麻布の平均値はほぼ同じであるのに比べて、新田島は非常に小さいことが分かる。

現代生活においてはあまりに小さなこの居住面積が、新田島の路地内の人々の生活や、人間関係、溢れ出しの状態に非常に大きく影響を与えているのではないかと考え、居住面積の小ささに着目して溢れ出しを考察することにする。

具体的には時代の変化と共に溢れ出しがどのように変化してきたのかを調べることで、現代の平均的な生活と比べてあまりに狭い居住空間でどのように暮らしてきたかを調べる。

#### (2) 本調査

##### (a) 調査結果

ヒアリングによって得られた内容を表2に示す。また、実測調査によって得られた平面図を図3に示す。表2からわかるように、現在住んでいる住民のほとんどが60歳以上であるが、長年この路地に住んでいる人もいれば、つい最近住み始めた人まで様々であることが分かる。

表2 住民情報

	家族構成(年齢)	居住年数	植木の手入れ
Aさん	夫婦2人 夫 妻(55前後)	10年	夏は朝晩にやる 冬はたまに
Bさん	女性1人(70代後半)	現在入院中	
Cさん	夫婦2人 息子1人 夫 妻(73) 息子(35)	37年	水のお風呂の水を使って水をやる 日よりの植木にもたまに水をやる
Dさん	女性1人(60代)	30年前後	定期的にじょうろで水をやる
Eさん	夫婦2人 娘1人 夫 妻(50前後) 娘(25前後)	50年前後	不明
Fさん	夫婦2人 夫 妻(70前後)	44年	鉢植を買ってくるが枯れる
Gさん	男性1人(75前後)	75年前後	不明
Hさん	夫婦2人 犬一匹 猫2匹 夫(62) 妻	30年前後	定期的にじょうろで水をやる
Iさん	姉妹2人 姉(75) 妹(74)	75年	毎日じょうろで水をやる
Jさん	男性1人(65前後)	65年前後	朝ホースで水をやる
Lさん	男性1人(67)	9年	たまにじょうろで水をやる
Mさん	男性1人(57)	2年(事務所)	なし
Nさん	女性1人(74)	51年	なし
Oさん	母親(60) 姉(40) 妹(25)	60年	なし
Pさん	男性1人(63)	10年	たまにじょうろで水をやる 植木に対する関心は高い
Qさん	男性1人(75前後)	不明	なし
Rさん	不在		

図3 1F平面図



## (b)時代の経過と溢れ出しの変化

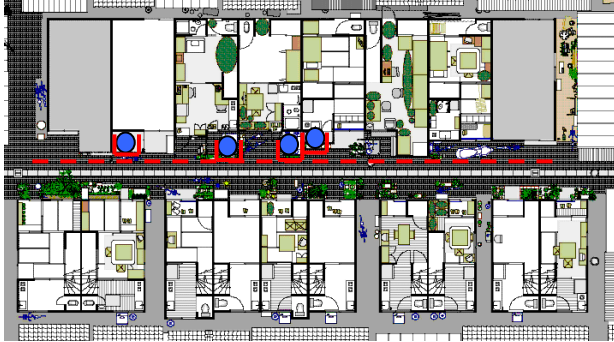
住民からのヒアリングを基に、現在の状態から可能なかぎり時間を遡って溢れ出しの変化を見てみる。その際、植木鉢の変化は追うことができないため、ベランダやトタンの囲い等、比較的時代が特定しやすいものの変化を見てみることにする。

まず北側では

### ①昭和54年以前に洗濯機がまず溢れ出してくる

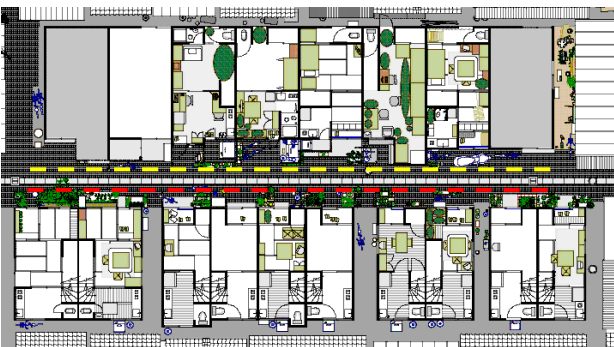


### ②昭和54年に最初のトタン囲いが出来、そのご増殖



破線の位置まで溢れ出しが進行しているのが分かる。

次に南側を見てみると北側のハードな溢れ出しに対し、比較的ソフトな植木鉢を使い同じぐらいの幅溢れ出させていることが分かる。



## 4. 結論・成果

本研究対象である新田島の路地はその居住面積の狭さから、住んでいる人々が皆根本的に拡大欲求を持っていると言える。しかし、細かく見てみると、平屋側では洗濯機に始まり、トタンでそれを囲うという外部の内部化、

つまり完全な自己領域化をしているのに対し、二階建て側では植木鉢という移動可能な、比較的ソフトなもので曖昧な自己領域化を図っていることが分かる。そのような領域化の強さの違いがあるにも関わらず、住民同士が共存しているということから、何らかの調停機能が働いていると考えられる。これはヒアリングでも度々耳にしたことであるが、「平屋は狭いから」という暗黙の了解が担っていると感じられた。

以上の事をまとめると、ここでの路地とは、住居内部では処理できない欲求の補完と、住民同士の欲求調停の場として機能していると言える。

本研究の成果としては、路地研究の事例を蓄積し、既往研究との比較を行ったこと、また、溢れ出しの持つ意味や効果について新たな視点を得たことが挙げられる。

## 5. 今後の課題

今後の課題として以下の三点が挙げられる。

- ・現象だけでなく人間関係も含めた考察
- ・人間関係を測る方法の確立
- ・より正確で詳細な時間変化を追うために、図面や写真などの資料を用いた考察